

# 図書紹介

荒木肇 著 賛助会員

## 『日本軍はこんな兵器で戦った』

佐藤 正 陸自78

本書は、幕末から維新にかけての歴史や近代の戦史に興味のある方には、大いに参考となる書だと思う。

本書には、幕末・維新から大東亜戦争までの小銃、騎銃、機関銃、拳銃、手榴弾、擲弾筒などの小火器がすべて登場し、設計・形状・装填システム・弾薬等に関する技術的事項から、実戦での利点・欠点まで詳しく説明されている。また、本書を読むことで、近代日本の兵器の変遷についても知ることができる。

副題に「国産兵器の開発と用兵思想」とあるように、日本の技術者が、どのような兵器を開発し、兵士がどのようにに訓練され、実戦でどのようにに戦ったのかという点については、写真や実例を挙げながら、理解が容易になるように書かれている。また、兵器が使用された当時の時代背景についても理解を深めることができる。

戦後の教育を受けてきた者は、日本軍は時代遅れの装備と精神主義で戦ったと教えられ、また世間に流布されている書物にも、そのような趣旨で書かれているものが多い。しか

し、本書を読むとそのような「定説」は一掃される。

時代遅れの装備という点に関して言えば、確かに日本は明治時代に開発した小銃で大東亜戦争を戦ったが、それは米国を除くすべての列強の軍隊も同じだった。

精神主義について筆者は、「日本軍は、科学的かつ合理的であり、火力を重視していた。また、独創的で精度の高い小火器の開発を求めた」と否定する。詳細は本書を読んでいただきたいが、日本軍の創意あふれる兵器の開発と運用に関する筆者の説明は、大変具体的であり説得力がある。

というのも、筆者は当時の軍人が書いた『偕行社記事』等の生の資料を丹念に調べ上げるとともに、陸自武器学校や陸自駐屯地の資料館に展示・保管されている兵器を実際に手に取り、操作を経験したうえで本書を記述されているからである。

本書を読み終え、国産兵器を開発した技術者とそれらを手にして実際に戦った祖父や父親たちに対して、改めて尊敬の念を深めることができる。

並木書房

〒170 0002

東京都豊島区巢鴨

2—4—2—501

電03—6903—4366  
価格 1600円+税